第２回「千年未来塾」 概要

１．趣旨

第２回千年未来塾は、第１回で共有された問いを踏まえ、宇陀で挑戦が生まれ、続いていくための条件とは何かをテーマに開催した。第１回が宇陀という地域を（強みと課題について）見つめ直す対話であったのに対し、第２回では挑戦や実践が生まれる環境とはどのようなものかについて、登壇者と市民が対話を通じて考える回となった。また、第２回では、市民から千年未来塾の運営に関わりたいという声も挙がり、対話が「参加」へとつながる兆しも見られた。

２．開催概要

日時：令和７年２月 28 日（土）13:00～15:00
会場：榛原総合センター　３階大ホール
参加者：市民、中高生、事業者、行政関係者、議員等
主な登壇者：
　藤田 浩之氏（医療・教育分野）、生田　優希氏（ロート製薬）
　宇陀市長
　David Janes 氏（国際教育・研究分野）※オンライン

３．第２回の振り返り

冒頭に第２回未来塾の振り返りを行い、

・課題は「解決する」前に、まず問題を定義することが重要である
・イノベーションは新しい技術だけでなく、既存の要素の組み合わせから生まれる
・異なる立場の人が交わる場が、新しい挑戦の出発点となる
・完璧な計画よりも、小さな実験を重ねることが重要である

藤田氏からは、
「誰かがやってくれるのを待つのではなく、自分が動く必要がある」という言葉が示された。
これは、挑戦を個人の勇気の問題にするのではなく、地域として挑戦を受け止める文化の必要性も示している。

４．地域資源の価値という問い

・山林資源
・農林業
・地域企業
・文化や自然

など、宇陀には多くの資源があることが改めて確認された。一方でそれらが十分に価値として外部に（内部も含めて）伝わっていないという課題も共有された。藤田氏からは「価値は最初から決まっているものではない」という指摘があり、誰が、どのように設計し、伝え、使うかによって、地域資源の価値は変わるという視点が示された。

５．挑戦が続く地域の条件

企業の地域での挑戦の取組みとしてロート製薬の生田　優希氏より、Next Commons Lab 奥大和事例が紹介された。その中で、挑戦が続く地域には次の３つが必要であることが示された。

・挑戦する人
・応援する人
・受け入れる地域

この３つがそろうことで、挑戦は単発ではなく地域の文化として継続していくという事。

６．第２回千年未来塾で示されたこと

第２回の対話を通じて、次の点が確認された。

・宇陀には挑戦の芽がある
・小さな実験を積み重ねる事の重要性
・挑戦を支える環境や関係性の必要性

また、藤田氏からは、「市民が当事者という意識を持たなければ、この取組み（千年未来塾）は続かない」という指摘があり、千年未来塾の今後の運営についても、市民が主体的に関わる形で進めていくことの重要性が指摘された。

７．千年未来塾の行動指針について

第１回・第２回の対話を通じて、次のような考え方が共有された。

・正解を探してから動くのではなく、動きながら考える
・完璧を目指さず、まず小さく始める
・問題を定義することから始める
・多様な人が交わる場をつくる
・一番の失敗は挑戦しないこと

これらは、千年未来塾の対話から生まれた行動指針として整理し、発信していくことが求められる。

８．第３回以降の進め方

第１回・第２回を通じて、千年未来塾は、地域の未来について多様な立場の人が対話する場として開催してきた。対話の中では、宇陀の資源や課題、挑戦のあり方などについて意見が交わされるとともに、参加者の中から新たな取組みや取り組みへの参加意向も生まれている。

藤田氏からは、宇陀という地方にいながら国内外の多様な知見や分野の人と出会い、そこから新しい発想や挑戦が生まれるような場に千年未来塾をしてはどうかという提案があり、藤田氏の繋がりのある国内外の多くの分野の専門家や事業家とをゲストとして宇陀に招く事となった。そして、その運営を千年未来塾参加者から募り、市民一人ひとりが地域の未来に関わる機運醸成を図る。

さらに、行動指針のまとめや、ＳＮＳの発信など、千年未来塾の動きを周知する取組についても市民の参加を呼びかけて行う。

９．ゲスト講演の進め方

　各回のゲスト招致にあたり、市民の中から運営メンバーを募る。運営メンバーには、

・ゲストへの招致文の作成

・当日の準備や進行への協力

・終了後のお礼の作成

　など関わってもらい、市民が主体的に千年未来塾を運営していく仕組みをつくる。なお、運営については、方向性が大きく逸れることがないよう、藤田氏及び事務局がサポートを行いながら進めていく。